
とある雑草の話

M2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある雑草の話

【Nコード】

N 5 7 6 2 P

【作者名】

M 2

【あらすじ】

「植物」と「恋」をテーマにした短編3本です。

1・「とある雑草の話」 2・「バラ姫」 3・「傾き電柱と野花の話」

『とある雑草の話。』

始まりの話

今日も小鳥たちは、おじさんの所に集まります。

「おじさん、おじさん、今日はどんな話をしてくれるの？」

見晴らしの良い高台におじさんは立っています。その体から伸びる幾重もの電線を小鳥たちは宿り木代わりにしているのです。

「そうだなあ、どんな話が良いだろうか」

ゆっくりと、のっそりとおじさんが口を開きます。

おじさんは、この街で一番古くから立っている電柱です。立てられたところは最新技術の固まりでありましたが、さすがに何十年も立ち続けておりますので、あらゆる所にガタがきています。

この街の小鳥たちは——いえ、カラスだって、両隣りに立つ背の高い木だって、おじさんのことが大好きでした。

なぜなら、おじさんは長生きだけあって、色々なお話を知っているのです。

「こないだは冒険の話を聞いたから、今日は素敵なお話が良いなあ。例えば、そう——そうね、恋愛のお話が良い」

一羽がうつとりとした顔で言いますと、

「そうね、そうね、それが良い」

ピーチク。

パーチク。

他の鳥たちも口々に歌います。

おじさんはそんな小鳥たちの様子をニコニコと柔らかな表情で眺めています。

「恋愛の話か、そうだなあ、例えば——」

一、とある雑草の話

「ああ、良かった。今日も、摘まれはしなかった」

胸いっぱい「恐れ」を、雑草はぶわつと吐き出しました。

朝焼けに、「恐れ」を抱き、夕焼けに「安心」するライフサイクル。いつたい、どうしてこんなことになったのか——その理由を雑草は知っていました。いつからかも、何故なのかもちゃんと知っていました。

「あの子はきつと、何の重荷も恐れももっちゃいない。ふわふわ軽いのは格好そのままだ」

雑草の視線の先には、軽やかに揺れる草が一つ・二つ・三つ——数えるのも馬鹿らしくなるほどに、集まって生えています。

ある日、ある時、その草だけがとてもとても愛されていることに雑草は気付いたのです。

ほんの数か月前まではこんな草はこの土地には生えていなかったし、雑草ものんびりと日光浴などできたものです。

けれども、ある日、近くの家に住む少女がこう言ったのです。

「ここには新しい植物が来るの」と。

そんなのはおかしい話です。何しろ、先に此処に住んでいたのは雑草たちの方なのですから。どうして新参者に住みかを明け渡す必要がありましょう。

それなのに、少女は、

「さつさと居なくなつて」

と自分勝手なことを口にして、「いやだ」と主張をする雑草たちを狩り始めたのです。それも命の要である根っこごとです。雑草

の仲間も、一部も、ずいぶんと酷くされてしまいました。

対照的にやってきた草たちは随分と少女に可愛がられました。水をもらい、肥料をもらい、太陽の光をいっぱいにあびてスクスクスク

スク育って行きます。

やせ細り薄汚れた自分たちとは正反対の姿。

雑草の仲間も、その仲間も、

「何だいいつらは気取りやがって。いったいどこの貴族様だ」

「自分で養分も探せないくせに、なんて貧弱な奴なんだ」

と口々にそいつらの悪口なんかを交わします。

確かに雑草たちはわずかな栄養を探すために必死で根をのびますし、わずかな栄養でも生きていけるように余計な装飾品なんてつけません。

けれども、その子たちはというとそんな悪口なんて受け流すようにサラサラと風になびいて小さな笑い声を軽やかに鳴らすのです。

「いいなあ」

雑草はというと、もちろん不平感もあったし、いつ自分が狩られるかという「恐れ」で胸がいっぱいでもありました。

けれども、雑草は心の底から憧れたのです。

その草の、軽やかさに、美しさに、コロコロと可愛らしいその声に、人間たちに愛されるのも、納得のいくその振る舞い。自分なんかとはとおも離れた存在。

「自分もあんな風になりたいな。もしなれたら、うんと愛されるんだ。仲間たちと一緒に楽しくお話をするんだ」

雑草は、

「今日も一日ありがとう神様」

今日も一日無事に過ごせたことに感謝すると、続けてこうお祈りをしました。

「でもね、も一つだけお願いを聞いてほしいのです。神様神様、お願いです。どうか僕をあの草のようにしてください」

それから一カ月が過ぎて、雑草は「恐れ」を呼吸しながら、神様にお祈りを捧げる日々を過ごしていました。

「あの子は、どうしてしまったのだろう」

雑草は、急に元気が無くなってしまったあの草たちが気がかりでな
りませんでした。

あんなに美しかった髪も、今では潤いを失ってパサパサとしていま
すし、楽しい会話も聞こえてはきません。時折、カサカサと肩を
寄せ合う音が聞こえるくらいです。

そんな草のことを、周りの雑草たちは「ざまあみろ」とあざけ笑う
のですが、雑草はというとそれを聞くたびに嫌な気持ちになりました。
た。どうにも胸の奥がチクチクするのです。

元気がないのは少女も同じでした。前よりも一層あの子たちに優し
くしているというのに、一向にあの子たちが良くなる気配がないか
らです。

やがて、少女の苛立ちは雑草たちにぶつけられるようになりました。
「お前たちのせいだ」と言わんばかりに、仕打ちは一層厳しくなっ
たのです。

次は自分が狩られるのだ――目前まで伸びてきた手に、雑草は覚悟
を決め、固く目と心を瞑りました。

どれほどの時が経ったでしょうか。一瞬のようにも、数時間のよう
にも感じられましたのに、意識が断たれる気配はありません。不思
議に思った雑草はおそろおそろ目を開き、

「――」

そして、ハッとなりました。

そこには泣きじゃくる少女の姿がありました。

「恐れ」の象徴であったはずの少女。

いつも自分たちのことを憎らしげに睨みつけていた少女。

苦手だった、少女。

なのに、今の少女はというと、ひつくひつくと喉を鳴らしていて、
か弱くて、余りにもちっぽけで、薄汚れていて、やせっぽちで。

「恐れ」なんてこれっぽっちも感じられません。

だって、だって、その姿はまるで――

「一緒じゃないか」

呆然と、雑草は呟きます。

元気を無くしたあの子と、少女と、そして自分。

みんながみんな同じ“ツライところ”にるように思えて、雑草は可哀そうと思う傍らで、なんだか胸がぐつと掴まれるような、ジワリと染み出してくる暖かい感情に胸を焼かれる思いでした。

雑草は、嗚咽を漏らし続ける少女から目を離せないまま、

「助けてくれて、ありがとう」

素直な気持ちを口にしました。

心の底からの、感謝。

去っていく少女の背を照らすのは、曇りがかった夕焼け色。

「今日も一日ありがとう神様。」

雑草は、その背が見えなくなるまで、何度も何度もお祈りを唱えました。

「でもね、もう一つだけお願いを聞いてほしいのです。神様神様、お願いです。どうか僕に、少女への恩返しをさせて下さい」

「恐れ」もあの草も消え失せてから、幾日かが過ぎました。

雑草は、どうにも寂しくてたまりません。

心のガラス玉に二か所ほどぽっかりと穴があいて、すうすうと風が通り抜けていくようなのです。

他の雑草たちと話をしたり、日向ぼっこをしたりしていると、確かに嬉しいも満足も幸せも心にポンとあらわれてはくるのですが、その穴からすぐにポロポロ落ちてしまうのです。

心の中身が何にもない空っぽの状態を、“寂しい”と言っただと雑草は知りました。

「どうしたんだい、浮かない顔をして。おれたちはここに住む権利を勝ち取ったんだぜ」

すぐ側にいた雑草が、えっへんと胸を張って誇ります。

けれども雑草はというと、ソヨソヨと軽くなびいてみせるくらいしかできず、愛想笑いすらできずにいました。

だって、自分たちがまだ生きていられるのは、あの少女の気まぐれでしかないのですから。

空っぽで寂しい毎日の中で、雑草は決まって同じ夢をみるのです。

その夢の中では、自分もあの草と同じ姿になっていて、黄金色の畑の海で、一緒に揺れたりお喋りをしたりしているのです。

その中を一人の少女が駆けていきます。幸せそうな顔をして、綺麗な衣装と「裕福」を身にまとい、とても幸せそうな顔をしています。

あの草と少女、二つの笑顔に囲まれて、雑草はその夢の中では満足を得ることができました。だから、起きる寸前に願うのです。

「ああ、これが現実になれば」と。

今日もまた、雑草は願いとともに関わりました。

綺麗な朝焼けは、自分を、荒地を、黄金色に染め上げます。

その時ばかりは薄汚れた姿を忘れることができ、「ああ、願いがかなったのだ」と雑草は一時の安らぎを得るのです。

けれども、その日は少し違いました。

荒地の片隅に、長く伸びる影が一つ。雑草はそちらに目をやり、

「あ」

と息をのみました。

「貴方は——」

雑草の両の目には、少女の姿が映っています。煌々と燃える朝焼けを背にして。すっと姿勢を整えて、立ちつくす姿が。

けれども、雑草がハツとして、つられてピンと背を伸ばしてしまっただのは、少女が居たからという理由だけではありません。

これまで雑草が見てきた少女の姿はというと、薄汚れていて、ひよる長くて、どんよりと沈んでいて——自分とそっくりなものだったはず。

そう、そのはずだったというのに。

「ああ——」

少女の言葉すら聞き取れないほどの、高揚感。

少女は、雑草たちをまっすぐに見つめています。

けれども、その視線は、これまでのように冷たくなって。厳しくもなくて。寂しくも悲しくもなくて。

すべてがすべてその反対言葉。

暖かくて。優しくて。ふんわりと包み込まれるようで——

自分に、笑いかける少女の姿。

何回も、何十回も夢に見続けた光景。

朝焼けに照らされた少女の笑顔に、雑草は、一瞬で心を掴まれました。

それは、あの草に対して抱いた、じわりとした滲みだす暖かさに、
よく似ていました。

「彼女のために在りたい」

心を掴まれてからというもの、雑草は”彼女のために”在りました。
少女は丁寧に雑草を刈り取りますと、大切な宝物のように倉庫に保管しました。一日に一度ほんの少しだけを取りだして、右で挽いて粉にして、パンを作って食べるのです。

雑草はいつの間にかあの草と似た姿になっていました。

あの子よりも薄汚れていて、作れるパンだってカスカスだけれども、
少女が満足に食べることができる程度にはあの草を真似れているよ
うなのです。

「ああ、願いは叶うんだなあ」

そうしている内に、荒地には、雑草ばかりが生えるようになりまし
た。

少女は雑草を手厚く扱ってくれるようになりました。あの草にしてい
たまではいけないものの、自分以外の種類の雑草を抜いてくれた
り、水をくれたりするのです。

今朝も、彼女の家の煙突からは煙が棚引き、焼きたてのパンの香ばしさが雑草の元にまで届きます。

それをほおばる少女を窓越しに見つめながら、雑草はニコニコと風に揺れています。

今朝は一層上手に焼けたのでしょう。彼女はキラキラと目を輝かせて、

「ああ、おいしい」

と小さく――けれども、はつきりとささやきました。

雑草は、顔と胸の真ん中がぼうつと熱くなるのを感じました。

おいしいという言葉と、少女の目の輝きは、夕焼け空の下でも、星空の下でも、消えることなく、雑草の心に留まり続けました。

そうして、雑草は心をこめて願うのです。

「ああもつともつと彼女のためにありたい。神様神様お願いします。

僕は彼女のためにあり続けたいのです」

自分のことを、おいしいと言ってくれた。

何でだろう、ただ、それだけで。

「少女のためにありたい」

と、より一層強く願えたのです。

やがてたくさんたくさん時は過ぎ。少女も年を取りました。

手入れが行き届かず、荒れ果てた畑。それでも変わらず雑草は根を下ろしていました。

今でも彼女は、毎朝、朝焼けと共に雑草の元へ足を運んでいました。けれども、ここ3日間ほど、彼女は家から出てくることはありません。窓からじつと沈んだ目をして、雑草のことを見つめているのです。

痩せこけて、しわくちゃで、真っ黒で、とても裕福とはいえない彼女の姿は、結局雑草自身のものとそっくりで。

「ああ、結局僕は彼女を豊かにはできなかったのだ」

雑草は彼女が”豊か”ではない現実に、身を裂かれる思いでした。

「どうしたら、彼女を豊かにできるのだろう」

彼女の元気がなくなつてからというもの、雑草は朝から晩まで解決方法を考え続けました。その一生懸命さと言えば、久しぶりに彼女を夢に見るほどです。

夢の中の彼女は、今の彼女が持たないモノをたくさん持っています。あの美しい草でできた美味しいパンを毎日食べておりますし、おかずだって豪華です。家だって、着てる服だって、肌や髪 of 艶だって、比べ物にならないほど立派です。

この中のただ一つだけでも彼女に与えることはできないだろうかと、雑草はより深く悩みこんでしまふのでした。

彼女の横顔は日を経るごとに元気を失つて行きます。もちろん外に出てきてもくれませんし、起き上がつてこちらを見るのもほんの僅かな時間になつてしまいました。

「ああ、神様——」

つらい。辛い。ツライ。

変わりの無い日々についてしか忘れかけていたその名前。最後の望みとばかりに雑草は神様の名を呼びました。

「ああ、神様お願いです。彼女に豊かさを与えて下さい——」
すると、

「神様神様うるさいやつだなあ」

雑草の足もとから不機嫌そうな声が聞こえました。

「貴方は——？」

驚いて目を向けると、ちらりちらりと白が揺れているのがわかりました。

「ああ、残念ながら俺は神様ってヤツじゃない」

雑草しか居ないはずの畑に、ただ一つ紛れ込んだ綿帽子。

「けれども何だね、あんたが鈍感だからちよいとちよっかいをかけなくなつたわけさ」

「鈍感？」

「ああ、見ているこっちの方が退屈してしまうくらいにね」

綿帽子の言葉が理解できず雑草は戸惑いました。綿帽子はというとやれやれといった表情で、

「あんたは、結局のところ、どうしたかったんだい？」

「彼女を豊かにしたかったんです」

「それはわかつているさ。あんたが何度も何度も呟いていたことだ。俺が聴きたいのはそんな結果じゃないよ。その理由を聞きたいんだ。どうしてあんたは彼女を豊かにしたいって、そう願ったんだい？彼女がどうあることが、あんたにとって一番幸せなんだい？」

「それは――」

口ごもる雑草を綿帽子は鼻で笑います。

「はん、鈍感に加えて、贅沢ものときたまんだ。神様に頼る前に、まずは自分の心に目を向けてごらんよ」

そう言つて綿帽子はフイツと雑草から顔を背けてしまいました。

「あの――」

「もう話しかけないでくれよ。気が散る」

「でも――」

「安心しろよ、俺はここに居座る気なんてサラサラない。もっともつと良い所まで飛んでいくさ」

綿帽子は自慢の綿毛を誇らしげに揺らしました。

「……一つだけ、教えて下さい」

「ん？」

「貴方にとつて、豊かさってなんですか？」

「豊かさ、ねえ」

綿帽子はふわりと浮きあがりました。

「そりゃあ、満腹にもなりたいし、綺麗にもなりたいさ。たくさん
のヤツにちやほやされてもみたいさ。恋をして、愛されて、繁殖し
て、子孫をたくさん増やすことができたなら、豊かも豊かだろうよ」
「……………」

見る見る内に顔を暗くする雑草に綿帽子は笑いかけます。

「でも、今のアンタみたいにいることができれば、十分豊かなんだろうなって思うよ」

「え、それってどういう――」

続きを問う声は風にかき消され。綿帽子は風に乗って飛んで行ってしまいました。

「――」

空は、オレンジ色に染まり始めていました。夕暮れが近づいているのです。雑草は、綿帽子の行方をぼんやりと見送りながら、わさわさとたくさん自分を揺らします。彼女と出会った時には考えられないくらいに量になった自分を。

「――痛いなあ」

綿帽子の言葉は突き刺さるようで、心がチクチクと痛みます。そう、痛いのに、イタイのに、どうしてでしょう。か胸の真ん中は熱いのです。脳裏にも瞼にも彼女の姿が浮かんで離れないのです。

「会いたいな」

彼女のことが気になって。

どうしても気になってしまつて。

雑草は縋るような思いで彼女の方へと目をやりました。

「――」

ドクン、ドクン。

脈立つ鼓動。

窓は、ゆっくりと開かれます。

「あ――」

そうして窓の縁にしわくちゃな手が置かれて、彼女が窓から身を乗り出す姿が見てとれました。起き上がっているのもやっというくらいに力のない肩。今にも途切れてしまふんじゃないかというくらいに細い息。

けれども彼女は窓に置いた手に力を込めて、視線をあげて、真っすぐに雑草に向かって、

「ありがとう！」

と声の限りに叫んだのです。

夕焼けに照らされた彼女の笑顔はとても美しく、眩しくて、黄金色で――

「私に希望を与えてくれてありがとう。私をここまで長生きさせてくれてありがとう。私に美味しいパンをありがとう。私の――生きがいとなってくれて、ありがとう。」

少女の一言一言からしぐさから表情から、雑草は目を離すことができませんでした。雑草が求め続けた”理想の彼女”がそこに居たからです。

「ああ――」

雑草は流せない涙の代りに体を揺らします。自分に足があったら全力で彼女を支えに行ったことでしょう。自分に手があったらしっかりと彼女を抱きしめたことでしょう。

「ああ、ああ――」

こみあげてくる思いをどう言葉にすれば良いのでしょうか。

「幸せ」では足りないくらい幸せで。

「嬉しい」でも違和感を覚えるほどに嬉しくて。

全部、全部、足りなくて。

「僕は――」

雑草はこれまでを振り返ります。

ずっとずっとあの草に憧れた日々でした。

ずっとずっと少女の幸せを願った日々でした。

――そうして、今。

ちよつとぶかつこうだけれども、雑草はあの草に似た姿になることができました。

ちよつと遅くなりましたが、雑草は少女に「豊かさ」を与えることができました。

「ああ、そうか――」

綿帽子の言っていたことの意味が今ならわかるような気がします。
振り返り終えると、雑草は噛みしめるようにゆっくりと呟きました。
「僕は、あの草と彼女のことを、ずっとずっと好きだったんだ」
単純にひたすらに、ただ、ただ、好きだった。
「大好き、だったんだ」
最期の最後にしっくりと来る言葉を見つけると雑草は大層満足な気持ちになりました。遠い昔に空いた二つの穴が今ようやく完全にふさがった心地でした。

それから――

朝焼けと夕焼けを何度も何度も繰り返す。

あの草も彼女も失って。

それでもまだ、雑草は揺れ続けているのです。
心に真ん丸の、キラキラと輝く満足を抱いて。

――恋をしてライ麦になった、雑草の進化論。

二、バラ姫

まともに日の当たらない部屋。
暗い部屋。

ジメジメと湿った部屋。

生命を感じない、この部屋。
がらん朧とした部屋の片隅には、たった一つだけ、不自然に机が残

されておりまして。キィキィとイスが回る音が室内に響き渡ります。机の上には、からっからの花瓶に挿してある枯れ果てたバラの花が一輪。日記帳が一冊。その上に置かれた手紙が一通。シルクハットを被った男は、そつとその手紙に手を伸ばしました。触れた瞬間に、ふわつと白い埃が舞い上がるのが見えましてのは、ただ一筋、そこにだけ光が当たっていたからでありました。

ペラリ。ペラリ。

名探偵さんへ
バラ姫より

こんにちは。

いえ、こんばんはでしょうか。

それとも、おはようございます？

ああ、すみません。この際挨拶なんて必要ありませんでしたね。貴方が知りたいのはあのことですね。

え？ あのことって何だって？

あらあら。あらあら。

とぼけたって無理な話ですよ。私——バラ姫と彼の関係に興味関心を抱かなければ、この手紙を目にすることなんてありえないのですから。

それがわかっていたからこそ、私はここにこれらを置いてイッタのです。ああそうでした、だとしたら、挨拶は「ようこそいらっしやいました」が妥当でありましたか。

では、改めてご挨拶いたします。ようこそいらっしやいました、名探偵さん。

貴方様こそは、この破たんした推理小説の主人公。女と男の愛憎劇

を無理やりに捻じ曲げて、喋喋結びにして、殺人事件にしたてるお方。
わかっております。ええ、彼が死んでしまった時から私は全てわかっていたのです。
だから私は告白いたしましょう。
だから私は公開いたしましょう。
だから私は反論いたしましょう。
何故、彼が死ななければならなかったのか、その一切合財を。

ペラリペラリ。

バラ姫の日記

「――私は、私が嫌い」
観賞用の真っ赤なバラは、大輪の花弁を揺らして、そう言いました。

「私が綺麗ですって？ どうして？ 何で？ こんなにも醜く歪んでいるのに」

このバラは何を言っているのでしょうか。十分綺麗だというのに。

私は、バラの言い分に納得できずに反論しました。苛立ちが、声にまであらわれていたことを覚えています。我ながら心が狭いと、内面苦笑いを浮かべたものです。

「そんなの、人間のエゴじゃないの」

バラは、なおも自らを罵りました。

「ああ、野生のバラがうらやましい。どうして奇形である自分が愛されるの？ どうして、一族の異端である自分が愛でられるの？」

五片の花びら。正常な雄蕊と雌蕊。植物として生きていける。その姿が羨ましい。とっても、とっても、羨ましい――」

バラは嘆くたびに、葉に落ちた朝露で、茎を、刺を、花瓶の表面を濡らしていきました。

その様は、まるで泣いているようでありまして、随分と哀れな姿だと私は不憫に思ったものです。

バラは一通り嘆きますと、不意に萎びた花弁を机の上に一つ落として、私をじいと思つめました。

「でも、それは貴方も同じでしょう」
引き込まれるような赤と。

艶めく紅と。

「ねえ、バラ姫さん」

やれやれ、と私は小さく首を振りしました。

類は友を呼ぶとはこのことを言うのでしょうか。

バラは私の本質を知っています。

私もバラの本質を知っています。

そう、私も、私が――

ペラリ、ペラリ。

バラ姫様へ

少年 A

「――嫌い」

バラの花束を払いのけて、貴方はそう言いました。

「こんな花、大嫌い」

僕の愛の証は、虚しく地面に舞落ちったのです。

貴方の足元には、赤、赤、赤、紅――

素朴な花が、大好きな。そんな僕が恋をしたのは、高校に進学をした時のことでした。

華やかな鑑賞用の花に、恋をしました。

対照的な貴方に、恋をしました。

貴方は、まさに愛称通りのバラ姫でした。

バラのように華やかで、美しい容姿をしているからでもありますし、最もな理由としましては、貴方が周りの人をいとも簡単に魅了してしまうことにあるのでしよう。

すれ違った者はというと、老若男女問わず振り返りますし。さらには、一旦前を向いた後に、もう一度振り返るほどのなのです。

そんな高根の花なんて苦手なはずでした。自分と対等の価値をもつものにしか興味がないはずでした。

けれども、僕は振り返ってしまったのです。貴方のことがどうにも気になって、振り返ってしまったのです。

「こんなの、変だ変だ変だ変だ変だ変だ」

変。変。変。変。変。変。変。変。

偏。

日に日に違和感は膨らんでいきます。

僕も所謂思春期の青少年です。殊更に恋の悩みというものは、進路やら就職やら学業やらに匹敵するほどの耐えがたき問題でありました。

夜な夜な自分を慰めても、偽りの夢に救いを求めても、貴方への思いが終わることはありません。日に日に増していくのだから、いよいよ歯止めが利かなくなってしまうたのです。

ああ、どうして、どうして自分はこんなにも貴方様に惹かれるので

しょうか。私からすれば、この謎つてものは、日本文学史上、どの推理小説の謎よりも難解に思えてなりません。

——そう、貴方に告白すると決心するまでの僕は、本気でそう思い込んでいたのです。けれども、今になって振り返ってみればこの謎はごくごく単純な理由で解決できるのでありました。貴方のことをよく知りつくした僕ならば、すぐに気付かなければおかしい話だったのです。

それに気付けなかったのも、恋は盲目というヤツの弊害なのでしょうか。いやはや。

ともかく、ともかくなのです。

まだまだ阿呆だった僕は、それを知りたくて、貴方に真正面から告白をすることにしたのでした。

所持金で買えるだけのバラの花を買いました。かろうじて、両手で抱え無いと持ち切れない程度の量の花束を買うことができたことは、僕に高揚感を与えてくれました。

その中に、一枚、”僕からのメッセージ”を忍ばせて——今思い返してもキザったらしい演出だったと思います。

服は、残念ながらいつもの私服で。

雑草が、観賞花を抱いている。

そんなアンバランスさに、心が躍ったものです。

さあて、計画実行です。

貴方がいつも通る道で待ち伏せて。いぶかしむ貴方に声をかけ、バラの花束を差し出しました。

ただ、それだけのシンプルな告白でした。

結果、赤はバラバラに散ったわけですが。

「——花、好きでしたよね」

と、僕は思わず貴方にそんな言葉をかけました。

貴方はというと、地面に落ちたバラの花を見下しておりました。

「こんな花——」

まるで、醜いものでも見るように。

嫌悪感をありありと、隠すことなく、右足でぐしゃりと花弁を踏み
滲まれました。

予想外の貴方の反応に、僕は頭の半分ほどが真っ白になる思いでし
た。かろうじてまともに回るもう半分で、最良の対応を検討するこ
とになったのです。

何度も何度も頭を巡ったのは、携帯電話を片手に押し花のストラッ
プを見て微笑む柔らかな貴方の笑顔でありました。

けれども、貴方は正反対の表情で地面を睨みつけ、

「花は好きよ。大好きよ。でも、こんなのは嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い

——大嫌い」

ひと際大きな音を立てて、元・花束を踏み拉いたのです。ああ、無
残。あまりにも無惨ではありませんか。

僕は、どうして、そんなに嫌うのかと問いかけました。

「バラ姫が、どうしてバラを嫌うかって？」

貴方の目が一層鋭さを増しました。

「——八重咲きって言葉、知ってる？」

名前と意味くらいは知っていました。

八重咲き。

花びらが重なって咲く花の咲き方。

雌蕊と雄蕊が、花弁と化した、突然変異の花。

「バラってね、本当は五片の花びらと、正常な雌蕊と雄蕊を持って
いるの。でも、一般的には、八重咲きの姿が当たり前になってる。

異常なのに、自然じゃないのに、綺麗だからっていうそれだけで、
八重咲きが当たり前になってる」

貴方はそつとポケットの中から携帯電話を取りだしますと、かの
ストラップをゆらゆらと僕の目の前で揺らして見せました。

「そんなの、気味が悪いじゃない。だから嫌いなものよ」

そして、僕にそっぽを向いて、歩きだしてしまいました。すれ違う瞬間にも、僕に目を向けてはくれずに、です。

違うのに。

違うくせに。

僕の呟きに反応して、初めて貴方は僕を見てくれました。

当然のこと。僕は知っていたのです。貴方が本当にバラと同じだということ。

「……………」

黙り込んでしまった貴方。僕は先ほどまで貴方が立っていた場所まで足を進めました。

そこには、潰れた赤に塗れて、覗く白が1枚ありました。僕はソレに近づいて、しゃがみこみました。

すると、貴方が早足気味に、近づいてくるのが感じられました。僕は赤をかき分けてソレを手にとり、立ち上がるとズボンの裾についた花びらをほろいました。そうして拾い上げたソレ——僕からのメッセージを貴方に突きつけたのです。

これが、貴方でしょう、と。

「……………」

貴方は、そのメッセージを静かに見つめておられました。動揺なんて見られませんでした。けれども、僅かにその瞳に”哀れみ”の色が覗いたのを僕は忘れもしません。

本来なら、鏡であるはずのソレ。

けれども、違うのです。

写真に写る貴方と、僕の目の前に居るバラ姫は、全然違うのです。よく手に入れたものね」

貴方はパチパチと無感情の拍手を僕に下さいました。

僕は、貴方に惹かれてからというもの、貴方について何でも知ろうと努力していたのです。その結果がこの写真です。貴方の中学校時代まで遡った結果、その事実を知ったのです。

貴方は僕を真つすぐに見据えて下さいました。

「いつから、気付いていたの？」

この時ようやくと、貴方は僕に興味を持ってくれたのです。予想通りの展開に心が弾んだものです。だから僕は単純なそのトリックについて、さも層大に雄弁に語って聞かせてしまったのでしよう。

「単純なことですよ。例えばホラ、そのストラップ。仮にも、バラ姫と呼ばれている人が、どうしてそんな、素朴な花を大切にしているかが不思議で仕方なかったんです。調べて初めて知りました。野生のバラって言うのは、こんなにもシンプルな花なんだって。先ほど、貴方も言いましたよね、観賞用のバラは、八重咲きだって。そう、突然変異。奇形。ライフサイクルから逸脱した花です。本来、花が美しいのは、周りの生物の興味を惹くためと聞きます。だとすれば、バラは、美しさを求めすぎて、元の容姿から、ガリリと自分を変えてしまった花。――まるで、バラ姫。貴方そのものじゃないですか」

と。

「ええ、そうね」

一步、二歩。

貴方は、ゆっくりと僕に近づいてくれました。

僕は、動きません。何故かと言いますと、全てを貴方の意思に委ねたかったからです。

「私は、まさにバラ姫なんでしょうね」

貴方の吐息が、耳を擦りました。

バラの香りの香水が、鼻を擦ります。

気高いバラが、雑草に屈服したその姿。

近い。近い。チカイ。

ゾクゾクつと快感とも緊張とも言えぬ感覚が全身を走りまして、かあつと顔が、喉の奥が、体の中心が熱くなるのを感じました。

貴方は僕の手から、過去の自分を抜き取りますと、それとじいつと向き合いました。

「——綺麗になりたかった」

貴方はまるで、過去の自分に語りかけているようでした。

「綺麗になったら全部変われると思ってた。

バラだって、宝石だって、私だって好きになれると思ってた」

けれども——違ったのですね。

僕は、貴方の肩にそつと手を置きました

随分と変わり過ぎてしまった貴方を本気で哀れに思ったからです。

「——ええ、変わったわ。変わってしまった」

写真を借りる時、貴方の同級生たちは、一様に不思議がっており
ましたよ。何でこいつの写真が欲しいんだとか、同姓同名の別人だ
ろうとか。誰一人として、バラ姫と貴方を同一人物と認識する人は
居なかったほです。

ここで、僕は、貴方と約束をしました。“このことは、誰にも言
いません”と。貴方は僕の顔を窺っていたいました。ここから先、
交わされた会話を一字一句記録いたしますと、こういう風になりま
しょうか。

「僕は、このことを誰にも言いません。だから」

「……だから？」

「僕の恋人になってください」

「随分シンプルな脅迫ね」

「残念、告白のつもりなんですけど」

「私なんかの、何が好きだというの？」

「ああ、それなら」

僕は足元に目をやりました。

くしゃくしゃに千切れたバラの花びらが僕らの足元を覆っていま
した。

僕はそれをひと握り手に取ると、

「……！」

貴方の頭上に、花吹雪を降らせました。

「何を——」

舞落ちるバラの花びら。

頬を赤くする貴方。

僕は、ひらひらと続けざまに舞い落ちるバラと、ソレに彩られた貴方をじつと舐めるように見つめて、幸福感からにいと笑いました（おそろくとても不気味な笑みだったことでしょう）。

僕は、昔から、タンポポが大好きでした。どこにでも咲いている花だけど、何というのでしょうか。素朴で、すぐに手が届く花だったから好きだったのです。高根の花だとか、高価な花だとか、そんなのには全く興味を持てなかったのです。

だから、僕が、貴方に惹かれた理由は本当に単純なものでありました。真実は、あの時にした告白の通り。

「外見は観賞花なのに、内面は素朴な花に恋焦がれている。そんなアンバランスな所が、大好きです」

容姿なんて関係ない。性格も関係ない。本質が、素朴な花である貴方だから、僕は貴方を好きになったのです。

「……………」

けれども、けれども。

貴方は花弁を全て払い落しますと、

「残念」

と断言してみせたのです。

予想もしていなかった貴方の反応に、僕は戸惑ってしまつて、言葉もできませんでした。

「その理由じゃ恋人にはなれないわ。だって、私は今さら素朴な花になんてなれないし。なる気もないもの」

この時、僕と貴方の立場は逆転しました。

僕が一転、貴方の心を探る立場になつてしまつたのです。あまりにサバサバとした貴方の口ぶりは、やけに自信たっぷり、優位に立っていたはずの僕の心はグラリと揺れ動かされました。

だって観賞用のバラのことは嫌いだったはずだと指摘してもなお、貴方はくすくすと僕を笑いました。

「なあに？　もしかして貴方、私が後悔しているとも思っていたの？　だとしたら完全にお門違いだわ」

　　楽し気に、哀れむように笑いまして。

「私はバラが嫌い。そして、バラがそうであるように、私も嫌い。でもね」

　　貴方は、手にしていた携帯電話からストラップを外しますと、そのままソレを地面に落とし、躊躇なくぐしゃりと踏みつぶしてみました。

「周りに愛でられない私なんて、もっともっと大嫌い」

　　押し花を睨みつける貴方の冷たい視線。

　　ゾクつとしました。

　　一体、僕は何を根拠に貴方よりも優位に居るような錯覚を抱いていたのでしょうか。貴方を手中に収めた気になっていたのでしょうか。　　「もし、貴方も私のようになれるというのなら――」

　　僕は迂闊でありました。

　　人々が美しいバラの花を作るために、惜しめない時間と労力をかけているように、

　　貴方もまた、それ相応の努力をしてきたことを、おろかなことに僕はこの時初めて知ったのです。

　　大嫌いな自分を、“嫌い”にまで昇華するために、容姿を変えるまで、性格を変えるまで、自分を――全部なくしてしまうまでに嫌悪し失くし続けた。

　　そんな貴方を僕は見下してしまっただけです。大したことはないと見誤ってしまったのです。ああ、なんということでしょう。なんて残酷なことをしてしまっただけでしょう。

　　ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。

　　貴方が僕の前から姿を消してから、　　つうつと冷や汗が背筋を流れる感覚はいつまでもいつまでも消えませんでした。

　　キモチワルイ。キモチワルイ。キモチワルイ。キモチワルイ。キモチワルイ――

「私と同じになる。それだけの覚悟があるならば、友達にも恋人にも、何にでもなりますけれど、どうでしょう」

貴方の言葉がリフレインします。

頭の中の貴方は笑います。目元だけで笑います。

「さあ、どうです？ 私の同類になつては下さらないのですか？」
貴方は容赦なく笑います。お前なんかにできるわけがないだろうとせせら笑います。

それでも僕は、貴方のことを忘れることなんてできませんでした。細胞の一つ一つにまで貴方が染みついて、感染して、脳が考えることを拒否したつて、全身が全霊で貴方のことを考えてしまうのです。ああ、僕自分を変えなければ、貴方と同党ではいられない——でも、そんなことが簡単にできるわけがありません。
これまでの僕を捨てる？

失くす？

僕が僕で無くなつたらどうなる？

僕は僕で僕なのに僕として扱われず僕は何処へ行つても僕はここに居て僕は僕で僕に僕も僕へ僕から僕へと僕ぼくボク——

僕と貴方がぐるぐると目まぐるしく脳みそをかき回します。

これを書いている時にも、僕と貴方が耳元で囁くのです。貴方の輝かんばかりの笑顔がおいでおいでと手招きをするのです。

さあさあいらっしゃいいとも簡単な方法がありますよ」と。

ペラリペラリ

バラ姫の日記

——そう、私も私が嫌いです。

机の上のバラに水をたつぷりと注ぎます。キラキラと雫が輝いて、つやめいて、とてもキレイ。奇麗。綺麗。ぜんぶ全部キレイ。でも、私は貴方とは違うのです。

さあ、今日も鏡に目を向けましょう。全身が映る三面鏡。バラと同じくらい美しい私が映ります。自画自賛の美しさ。思わずにやけてしまいました。

なんて素敵でしょう。

なんて奇麗でしょう。

なんて嫌いな、ワタシでしょう。

嫌いではあるけれど、あの子のように“醜い”だなんて、絶対に思いません。それが花と人間の決定的な違いなのでしょう。

本棚から集めの辞書を取りだして、野バラを挟んでおいたページをめくります。押し花として完成したソレをラミネートして、ひもでくくって、携帯電話につけるのです。

さあて、でかける準備はできました。

「大嫌いなワタシを持ち歩くのは、少しでも、嫌いな“私”を好きになるためかしら」

背中越しに、バラの声が聞こえたように思いました。

ワタシは振り向かず、手をひらひらと振ってこたえました。

パタン。

日記帳を閉じる音を合図に、私はゆっくりと目を開きました。

徐々に目が暗闇になってきます。そうしてわかったのは、今のこの部屋に在るのは私と名探偵さんの二人きりだという現実です。

「バラ姫——」

私の日記に隅々まで目を通しました名探偵は、くいつとシルクハットのツバを持ち上げました。そして、その目で私を睨みつけてこう

言われたのです。

「これは、何ですか？」

名探偵さんは日記帳をペラペラとめくりますと、あるページで手を止めて私に付きつけました。

「決まっているではないですか。私の日記、そして――」

「彼の、遺書ですね」

「あらあら遺書だなんて人聞きの悪いことを」

私は名探偵さんから日記帳を受け取りますと、パタンとページを閉じて元あった場所へと戻しました。

恋に破れた男の、哀れな死。

世間一般は、彼の死をそう噂しました。

けれども、私はそうとは思いません。

私の日記に大切に収めた切れ端は、彼から私への、命を賭した恋文なのですから。私への惜しみない愛を込めた、一世一代の告白なのですから。

私は、机の上に手を伸ばし、枯れ果てたバラをくしゃりと握りつぶしました。私のストラップの野バラと同じようにドライフラワーは、いとも簡単に崩れました。自分なんて存在を、この世から消してしまつて、もはや自分ではない、単なる赤い固まりへと変わりきつてしまいました。

その間、名探偵さんは、私から目を離すことはありませんでした。そうして改めて、シルクハットのツバを挙げまして、断言するのです。

「結局は、貴方が彼を殺したのです」

名探偵さんの推理に、私はニコリとほほ笑んでみせました。

閑話

ピーピーピー声がする。

話の終わりを惜しむ声がする。

「残念、今日のお話はこれで終わりだよ」

あーあと諦めて、バサバサと飛び去っていく小鳥たち。

後に残されたのは、一羽のカラス。

「なあ、おじさんさ」

カラスは、宿り木代わりの電柱に話しかけました。

「おじさんは色々な話を知っているようだけど、おじさん自体はどうなんだ？　ずうっと生きてきたんだろう？　おじさん自身の話は無いのかよ」

「ワタシ自身の話？」

電柱おじさんは首を傾げます。

すると、アララ、何ということでしょう。

「……は？」

カラスが素っ頓狂な声を上げます。

何しろ、電柱おじさんは段々と傾いて行くのですから。けれども、おじさんかというと、自分が傾いていることなんて気にも留めずに、

「ワタシ自身の物語、物語……」

ブツブツと呑気につぶやいています。

「それどころじゃねえだろうが！」

カラスは慌てた様子でバサバサと勢いよくコバルトブルーに消えて行きました。

それでもおじさんは、悩み続けます。

「うーんワタシ自身の物語、物語………」

三、『傾き電柱と野花の話』

こういうのを、一目惚れ、というのでしょうか。

斜め六十度傾いた視点で、電柱おじさんは、その子に出会いました。

「君はいつたい、何て言うんだい？」

おじさんの問いに、その子は口をあんぐりと開けて答えます。

「おじさん、私を見たことがないの？」

おじさんは首を傾げます。傾げるといいましても、すでにおじさん自身が傾いているのですから、結局はちよいと空の方に首をあげたにすぎませんが。

「……本当に知らないの？」

その子は呆れた顔をして、はあとわざとらしくため息なんてつきましました。

おじさんかというと本当に知らないのだからしかたありません。ほとほと困り果ててしまったおじさんに、その子は応えます。

「……変わったおじさんねえ。私なんて、この街のどこにだって咲いているじゃない」

「えっ？」

おじさんはあわてて辺りを見回します。けれども、この高台の一角は見渡す限り緑の雑草ばかりで、その子のような姿の植物は一向に見当たりません。

「おや？全然、生えていないようだ——」

おじさんの素朴な疑問に、その子はハッとして、

「あーえっと、そう、そうね。そんなこともあるわね。まあ、そんなのは良いじゃない。いいわ、教えてあげる。私の種族は花よ、そ

のくらい聞いたことがあるでしょ」

と慌てた様子でまくし立てました。

「花、君が花だって？」

おじさんは、その子——野花をマジマジと見つめます。

小鳥たちが「花は綺麗なもの」と噂しているのは聞いたことがありますが、空から花を見降ろしてみても、随分と高いところからしか見降ろせないもので、おじさんは花というのは色のついたふかふかのじゅうたんのようなものだと思っていたのです。

「へえ、こんなに綺麗なモノだとは知らなかった。すごいものだ」
おじさんが素直な気持ちを口にすると、

「おや？」

野花は急に黙り込んでしまいました。

さつきまで勝気に揺れていた茎も葉も、ピンと直立不動で固まっています。

「え、えつと……お嬢さん、お嬢さん——」

「き、聞こえてるわよっ!!」

「うわっ!!」

野花が突然大きな声を出したものですから、おじさんは大変驚きました。その驚き様と来たら、傾いた身体がもとに戻るんじゃないかというほどです。——まあ、それは錯覚で、体はびくりともしないのですけれど。

「だ、大体あんたこそ何なのよ!急に倒れてきてビックリしたじゃないの!」

「ああ、申し訳ない。けれどもこれにはちょっと込み入った事情がありますね」

「事情だか何だか知らないけど、こっちはいい迷惑よ!」

「迷惑? どうしてだい？」

「それは——ああ、もうっ!」

どうやら野花は苛立っているようでした。こんな対応をされるのは初めてで、どんな風に接していいのか良くわからず、おじさんは

おろおろしてしまいました。

「あの、えっと……」

「とにかく、とにかくよ！　ここは私の場所なんだもの！　勝手に侵入なんて許さない！」

「君の場所？」

改めておじさんは辺りを見渡します。

密集した木々の隙間から僅かに零れる木漏れ日。野花の背後には傾斜地。約四十度の斜面には珍しいことに花時計が設置されています。眼下にはおじさんが見続けてきたのと同じ街並みが広がっていて、そっくりそのまま虫めがねで拡大したみたいな景色におじさんは目を細めました。

「良い場所だね、気に入ったよ」

「気に居られても困るっての」

「うーん、でも、私はしばらくここから動けないからね。こちらにお邪魔になるしかないですよ」

「……………ご厄介の間違いじゃないの？」

とことん厭味でつつけんどん。

「もう少し穏便に行きたいのですけどな」

「何だよ」

好意なんて一欠けらも見せてくれない野花の態度におじさんはシユンとしてしまいました。ここで引くわけにもいきません。

おじさんは、意を決して打ち明けました。

「美しい貴方に、恋をしたからですよ」

「はいい？」

ごくごく真面目な電柱おじさんと、終始あきれ顔の野花の少女。一本と一輪のやり取りはこんな調子で始まったのでした。

次の日。電柱おじさんは野花を楽しませてあげようと、これまで

小鳥たちにしてきたように楽しいお話を語って聞かせていました。けれども、

「他人の話なんて聞いて何が面白いのよ」

この野花は一筋縄ではいきません。おじさんの苦悩は続きが続いておりました。

ガヤガヤガヤと、風に巻き上げられて街の音がこの高台にも届きません。そのどれもが楽しそうに聞こえて、おじさんはハアとため息をつきました。

「ええつと、良い天気だねえ」

「そうね」

沈黙がどうにも気まずくておじさんは感じる情報という情報を片っ端から野花に伝えます。

「ああ、ここは本当綺麗な場所だね、街が見渡せるよ」

「そうね」

「ほら見てみなよ、あそこで小学生が歩いているよ。校外学習でもしているのかな。あ、あっちではおじさんとおばあさんが一緒に歩いている。幸せそうだなあ」

「……………」

「えつと……………」

野花はとうとう一言返事すら返してくれなくなってしまいました。が、おじさんは諦めずに根気強く続けます。

「ワタシは、ここ——いや、もつともつと高い所からずっとこの街を見て来たんだ。嬉しい記憶も、悲しい記憶も、たくさんたくさん見て来た」

「——へえ」

ここで初めて野花は反応らしい反応を見せてくれました。僅かに覗いた笑顔に、おじさんはドキリとしてしまいました。

「そっちの方が気になるわ。ねえ、おじさんのことについて聞かせてよ」

「ええつ！」

明るくなつた野花とは対照的に、おじさんは一転黙り込んでしましました。

「うーん、うーむ」

「ちょ、ちよつと、さっきまでべらべら喋つてたくせに何だよ」

「……ダメなんだ」

おじさんは、情けないと思いつつも、正直に理由を話すことにしました。どうしてでしょうか、この子に対しては誤魔化しをしたくなかつたのです。

「ワタシは、自分のことを話すのが大の苦手なんだ。ワタシの物語つていうのは聞いたことも見たこともがないからね。どう話していいのかわからない」

「へ？」

野花はきょとんとした顔をしておじさんを見つめていましたが、やがて、

「変なの」

と、笑いました。

「普通は自分のことの方が話しやすいはずでしょう。物語とかそんな難しいもんじゃないってば」

野花が余りに簡単に言うものですから、おじさんはちよつとばかりムツとしてしまいました。

「そんなことを言うんだったら、試しに君の話を聞かせておくれよ」

「いやよ、貴方が貴方の話をしてくれたら考えてあげる」

「まったく、天の邪鬼だなあ」

「へへっ」

「じゃあせめてコツの一つや二つ教えておくれよ。そのくらい良いだろう？」

「仕方ないわねえ」

野花はますます楽しそうに声を弾ませます。

「おじさんのそのまんまを話してくれればいいのよ。例えばそうねえ、いつ生まれたとか、どんなふうに生きて来たとか」

「そんなことでいいのかい？」

「当り前よ。大体ね、人生の全部が物語で出来てたら、世の中は大変なことになってるっての。いいから答えて」

そうして始まる、おじさんと野花の押し問答。

「おじさんはいつ頃生まれたの？」

「八十年ほど前。随分と離れた街にはワタシよりもっと古い電柱もいるけれどね」

「その人の事は置いてよ。えーと、じゃあ、おじさんの一番楽しかったことってなあに？」

「……ええつと」

おじさんは記憶をたどります。街を観察してきたことや、小鳥たちに話を聞かせてきたことも楽しかったはずなのですが、今になって振り返ってみると、何だか「楽しい」というには少し物足りないような感じがします。

それはいったい何故なのでしょう。

「ああ、そうか」

考えて考えて、おじさんは気付きました。

「お嬢さん、貴方とこうして話している今が、一番楽しいことかもしれない」

「な、何よ、ソレ」

「だって、こんな風にすっかりとしたやり取りをするのは初めてだからね。質問に答えて行くななんて経験、めったにしたことないよ」

「って、どんだけ寂しい人生送ってんのよ」

「んー決して寂しくはなかったんだけどなあ」

そう、寂しくはなかったし、楽しくなかったわけでもありません。けれども、こんなに心の底から楽しいと思えたのは初めてのようにおじさんは感じたのです。

「ねえ」

また次の日。野花はおじさんに問いかけました。

「気になっただけど、おじさんには仲間とか友達とかっていないの？」

「うーん」

今日もおじさんは即答することができません。何故だろうかと頭を捻ってみるのですが、相変わらず頭の中は真っ白で捻る以前の問題です。

「やっぱり変なの」

野花は、クスクスと笑います。

「例えば、例えばよ。向こう側にたくさん電柱が建っているじゃない。あの人たちとは友達じゃないの？」

「うーむ」

おじさんは、うんうんと一分ほど間をおいてから、答えます。

「彼らは遠くにいるからね。おいと大声を出したって届かないよ」
思い返してみれば、おじさんは自分の仲間である電柱と話したことがありませんでした。他の電柱はどんな風に毎日を過ごしているのだろうか——これまで思ってもみなかった疑問がおじさんの胸にこみあげます。

「ふうん、じゃあおじさんはずっと一人で居たようなもののね」
「いいや、必ずしもそうではないさ。なぜならワタシにはお話を聞きに来てくれた子たちがいたからね」

「でも、その子たちとはこんな風に対等に話したことは無いんですよ。それって友達とは言えないんじゃない？」

野花は、突き放すように冷たく言いました。何だか意地を張っているようにも感じられます。

「うーむ」

おじさんは再びうんうんと悩んでおりましたが、
「あつ」

おじさんは頭がさえにさえるのを感じました。なあんだこんなに

単純なことだったんじゃないか。頭の中にふわっと虹が広がって、語りも自然と饒舌になります。

「わかったよ、君がワタシの本当の意味での初めての友達ってことなんだ」

「とっ——」

野花は、ぴいぴいと大げさに茎を伸ばしまして、大反論を展開します。

「友達だなんて、馴れ馴れしく言わないでよ！大体、私と貴方はつい先日会ったばかりじゃないの！そんなの友達なわけないじゃない！」

「ううん、そうかなあ」

おじさんは記憶の本棚を探ります。

検索キーワードは「友達」。

すぐに何冊かの物語が引っかかりまして、おじさんは何十何百という「友達」のモデルを流し見ました。

「これを言ったらまた嫌な顔をされてしまつかもしれないけれど——」

おじさんはおずおずと自分が考える「友達」の定義のお話を語り始めます。

それは要約するとこんなお話でした。

ある小学校に中の良い四人の少女がいました。ある時、彼らは裏山で奇妙な洞窟を見つけました。そして、そこを探検する内に彼らは現代に目を覚まし記憶喪失のたミイラと出会ったのです。

彼らは最初とても驚いきましたが、すぐにミイラと親しくなりました。そうしてミイラから頼まれた「ミイラのルーツ探し」を快諾し、ミイラと彼の側にたむけられていたドライフラワーに纏わる奇奇怪怪な物語に巻き込まれていくことになるのです。

それは、彼らとミイラとが出会ってから僅か三日後の話でありました。

「——だから、ほんの僅かな時間しか過ごしていないとしても、十

分に関係つてのは築けるよ」

野花は眉間にしわをいっぱいにためて、いかにも不機嫌な顔をして話を聞いています。生き生きと語るおじさんとは対照的な表情です。

「それは本当の友達なんかじゃないわ。そんなの——ただの同情じやない。彼らはただそのミイラを哀れに思っただけ。弱い者・かわいそうな者を助けてあげようっていう優しさの押し売りだわ」

“同情”という言葉を口にした瞬間、野花が急に元氣なくしおれたようで、おじさんは胸がガツンと叩かれる思いでした。

目を伏せた野花はその花卉に朝露をいっぱいにためています。まるで泣いているようだとおじさんは思いました。

「おじさんがしていることも同じよ。私はそんなお仕着せがましい”ともだち”なんてじゃない」

「同情だなんて、どうしてそう思うの？ 私は、君を心から綺麗だと思ったんだ。だから友達になりたいと思ったんだよ」

「それは……！」

野花は一旦大きな声を出しましたが、深呼吸をすると、一転、うつと消え入るような掠れた声で、

「だって、普通——孤独は寂しいものなんでしょう」

と他人行儀に言いました。おじさんはますます野花の気持ちがわからなくなってしまうました。

「……………」

天気は、晴れ。

早朝の街。少し離れた所に覗く河川敷には、健康のためにジョギングをする人ばかりがパラパラと散らばっています。音も見た目も昼間の雑踏に比べたらちっぽけで。

街の様子と野花とを見比べてから、おじさんは言いました。

「一人は寂しいものだなんて思うなら、同情される立場だと思うのなら。どうして君はこんな所に居るんだい？」

高台にさあっと風が吹き抜けます。ざわあっと緑の海が波立ち、

ちよつと下に目をやれば、花時計の花たちも涼し気に風に吹かれています。

けれども、野花は一輪、ピンと背筋を伸ばしています。風になんて吹かれてたまるものか。と言わんばかりに意地を張るのです。

「勘違いしないでよ。私は寂しい存在なんかじゃない。同情される存在でもない。だって、私は私の意思でここににいるんだもの。居たくているんだもの」

野花は眼下に見える花時計に視線を向けました。その目に映る光は、暗くて鈍くて、まるで花時計を見下しているようでもありません。

「私には、他の奴らの方が理解できない。何であんなにみんなが集まって咲かなきゃいけないわけ？花壇もそう、花時計もそう、野花だってそう。みんなが集まって咲いて、それで綺麗って言われて何が楽しいのよ。みんなで協力して綺麗って言われたって、それは自分への評価じゃない。誰も自分一輪だけを見てくれない。だから私はここに居るの」

野花の言うことにも一理あるとおじさんは思いました。

集団の花は確かに美しいのですが、じっくりと見なければ一つ一つの花の魅力はわかりません。いともたやすく大勢の中に埋もれてしまいます。——そう、おじさんが野花に出会うまで花が綺麗な姿をしているだなんて夢にも思わなかったように。

でもそれがわかるからこそ、おじさんは違和感を抱かずには居られなかったのです。

「だったら、君はどうしてここに咲いたりしたんだい？」

「え——」

はじかれる様にして野花はおじさんに目を向けました。

「こんな目立たない所じゃ見てくれる相手なんてほとんどこないだろう？ワタシ以外、まともに君を見れなかった。それって本末転倒じゃないのかな」

野花はちよつと拗ねたような顔をして。

「……だつて、ここくらいしか一人きりになれる場所はなかったのだもの」

野花は俯いたきり、口を噤んでしまいました。こうなつてしまえばおじさんから野花の表情を窺うことはできません。物語らぬ背中にも声をかけることもできず、再び、二人の間には街の音ばかりが流れ始めました。

通学・通勤時間、人々が動き出す時間。ガヤガヤと活気あふれる音が、二人の停滞した空気に割って入ります。

花時計のさらに下には、大きな交差点がありました。横断歩道の信号が青になると、一斉に人々が動き始めるのです。よく観察していると彼らの視線はある一点に向けられていました。見上げてはいるのですが、おじさんや野花なんて眼中にないといった風です。

「やつぱり」

と野花は小さくため息をつきました。

「みんな、花時計ばかり見るのね」

そう、彼らの視線はおじさんや野花ではなく、その下——花時計にこそ向けられているのです。

「いつだつて誰だつて、みんな花時計ばかり見るの。そのもつと上には私だつて咲いてるのに。結局——華やかなものに目が行ってしまうのね。私は誰かに見てほしくてここに咲いたはずなのに」

野花は、苦笑いを浮かべました。

「あーあ、そこはおじさんの言うとおりね、本末転倒つてやつだわ」
まるつきり元気を失った野花の姿を見ている内に、おじさんは居てもたつても居られなくなりました。

「でも今は、ワタシが居るじゃないか」

衝動的に言つてしまつてから、おじさんはボウッとその体を真つ赤にしました。

「ええつと……」

おじさんはしどろもどろになりながらも、深呼吸を二、三回して——覚悟を決めました。ここまできたら後には引けません。

野花も、目を真ん丸にしておじさんを見上げています。

「ワタシは心から君を綺麗だと思う。ワタシじゃ役不足かもしれないけれど——少なくともワタシはそう思っているよ」

「おじさん——」

自分を見上げる野花がとても小さくちっぽけな存在に思えて。おじさんは野花との距離を近づけようと一生懸命力を込めましたが、こればかりは自分の思い通りにはなりません。

差し伸べられるのは言葉だけ。おじさんは必死で野花に自分の思いを伝えました。

「君に出会う前のワタシは、本当に迂闊だったと思うんだ。まさか足元にこんな素敵な花が咲いているなんて知らなかった。知っていたらもっともっと早くに君を見つけてあげられたのに」

君にこんな思いはさせなかったのに。

「私も——」

言いかけて、慌てたように野花は口を押えました。その仕草に目を奪われたおじさんは、怒られるのを覚悟で続きを聞きました。

「私も——何？」

「……………」

反応は、予想したものと違いました。どなり声は聞こえませんが、ジンとした痛みだつて届きません。

野花は、ただでさえ色鮮やかな花弁を、さらに鮮やかに染め上げて言いました。

「私ももう少し顔を上げていたら、おじさんに気付けたのかもなあって。ただ、それだけ」

この瞬間、初めて少女は素直な笑顔をおじさんに向けてくれました。その笑顔は、とてもかわいらしくていじらしくて愛おしくて。おじさんに手があるならば、そつと頭を撫でてあげたくなるほどでした。

「ねえ、おじさん」

「何だい？」

「これから、もっともつとおじさんの話を聞かせてくれる？」

「君も協力してくれるって約束してくれるならね。何しろワタシは自分の物語を語るのが大の苦手だからね」

おじさんはそうはにかみ、野花はしかりと胸を張りました。

「わかったわ、約束してあげるわよ」

「ワタシとしては君のお話ももつともつと聞いてみたいのだけだな」

「残念。前にも言ったでしょう。おじさんが話をしてくれたら、話してあげるって」

「ああそうだったそうだった」

「そうよ、順番はちゃんと守りなさいな」

一つと一輪は、指きりゲンマンの代わりに顔を見合わせてニイっと笑いました。

現実の傾きに比例するように、おじさんと野花の心の距離は縮まっていきました。野花がにつこりと楽しげな笑顔を見せてくれる時間も、おじさんの物語も段々と分量を増していきます。おじさんにとっても野花にとってもこの上なく幸せな時間が過ぎて行きました。けれども、傾きが急になっていくことにおじさんはぼつと空を見つめることが多くなりました。野花が声をかけても、

「……わああっ！ ビックリした」

とずれた反応をすることさえあるのです。

野花はそんなおじさんのことを

「やつぱり変な人」

と笑って見ていましたが、回数を重ねるうちに不安が胸をかすめるようになりました。空を見つめている時のおじさんの表情がどうにも引つかかって仕方ないのです。

何というか、心ここに在らずというか、今にも消えてしまいそうに儚く見えてしまったのです。

——そして、七日目の朝。おじさんはまた一つ傾きました。

「近い、近いわよ！」

野花はというと、やたらとおじさんから顔を反らすようになりまして。

「もつと離れてよ」

「どうしてだい？」

「どうしてって——」

口ごもった少女に、おやと思います。

これまでだったら、

「そのでかい図体のせいで、太陽の光が私に届かないじゃないの！」
くらいのことは言いそうなものです。

「仕方ないだろう、こればかりはワタシの意志では決めれないのだから」

「……どういうこと？」

野花の問いに、おじさんが答えます。

「ワタシは、明日には完全に倒れて、なくなってしまうからね」

「えっ……！？ 何よソレ、どういうこと？」

「言っただろう？ ワタシはとっても古い存在なんだよ。もういつ壊れてしまってもおかしくないんだ。ワタシが倒れてしまったら周りに随分迷惑をかけてしまうからね。とうとう処分が決まったんだ」
「じゃあ、傾いていたのって——」

野花の花弁が見る見る内に青ざめていくのがおじさんにも見てとれました。

「そう、工事の過程の副産物だね」

一週間の猶予が欲しい。そう人間に頼んだのはほんの気まぐれからでした。傾けられた時におじさんは思ったのです。最後にもう少しだけ、違った視点からこの街を見てみたいと。

だから野花に出会ったのは本当の偶然。

偶然からの副産物。

「ダメなんだ。これは絶対だ。明日にはワタシは跡形もなくなってしまうよ。君と違って、人間に作られたモノの避けられない運命だね。なあに、こんなのは作られた時から知っていたさ」

おじさんは傾きの先にある自分の根っこに目をやりました。

久方ぶりに太陽の光を浴びたソレは、ドロドロでボロボロで、我ながら、随分と頑張ったものだと思います。

「こんなにボロボロの両足で立っているのにも疲れたよ。ワタシだって、ゆつくりと眠りたい」

「そんな、でも、そうしたら――」

二度と会えなくなってしまう。

野花の目がそう言っているようで、おじさんはぎゅうつと胸が締め付けられる思いでした。

「お嬢さん、最後の七日間で君に会えて本当に良かった。ワタシは幸せ者だ。ワタシの物語と一緒に考えてくれてありがとう。聞いてくれてありがとう」

おじさんは野花への素直な思いを、語ります。

「君と言う花を知って、恋をした。毎日が本当に楽しかった。この人生に悔いはない」

その言葉にウソはありませんでした。立ち続けた数十年よりも、野花と過ごした七日間の方が、おじさんにとっては掛け替えのない思い出でありました。

「……………」

野花は、ただ、ただ、おじさんを見つめます。そして、葉っぱにたまった露をぼとりぼとりと流して。

「いや……いやよ」

悲痛な声。涙混じりの声。

おじさんは一層胸を切りきりと締め付けられる思いでした。野花のおれる姿なんて見たくなかったというのに、悲しそうな顔なんて見たくなかったというのに。

「いや！ 絶対にいや！ 居なくなるなんて許さない！ 自分のお話を一緒に作るんじゃないの？ 私のお話を聞いてくれるんじゃないの？」

「お嬢さん——」

「もう、知らない！」

それきり、野花はおじさんから顔を背けてしまいました。

「お嬢さ——」

「嘘つきなんて、大嫌い！ おじさんなんて大嫌いよ！」

「……………」

おじさんがいくら話しかけたって、野花はこちらを向いてはくれませんでした。

結局、おじさんが最後に見た野花の姿は、しおれた、悲しげな背中でした。

翌日。

おじさんの最期の日が来ました。

おじさんの周りをたくさんの人が囲んでいます。ふわふと粉塵が舞い上がり、おじさんの体を、視界を包み込んでいきます。

もうじきおじさんは完全に倒れて、壊されて、その一生を終えるのです。

おじさんはこの日が来ることを生まれた時から知っていました。だから怖さも悔いも感じないはずでした。

それなのに。

「……あの子に、声をかけなければよかったのだろうか」

このまま笑顔で終えるには、おじさんには心残りが多すぎました。

あの子ともう一度話がしたい。

あの子の笑顔がもう一度見たい。

あの子の話をもっと聞きたい。

「恋なんて、しなければ——」

あの子に恋をしなければおじさんはこんなに悩むほど、”生きることに”に執着はしなかったことでしょう。自分が終わることをツライだなんて思わなかったことでしょう。

これまでおじさんはたくさんの方の生き方を耳にしてきました。

ある時には、恋をしてライ麦になった雑草が居るという話を聞きました。

またある時には、美しさを求めすぎて自分を失った花がいるという話を聞きました。

小鳥たちや草花の噂話を聞くたびに、

「ああ、世界つてのは色んなモノの人生で埋め尽くされているんだな。大変だなあ」

と思ったものでした。自分には関係のない世界の話だと他人行儀に受け止めていただけでした。

「そうか、これが——」

けれどもおじさんは今、自分が物語の主人公になっていることをヒシヒシと感じていました。

この胸の痛みは自分が生きた証。

確かに生き抜いた証。

「……………」

倒れる音。体が砕かれていく音。

終わりへの、カウントダウン。

おじさんはかすれていく意識の中で、それでも顔を上げようと残された力を振り絞ります。

けれどももいくらか見上げたって、愛しの彼女の姿は見えません。見えるのは乾いた地べたばかり。

人工物であるおじさんには、あの子の姿を自力で見する方法はないのです。

「もう一度、見たいなあ」

おじさんは、あの子の笑顔を思い浮かべようとしますが、別れ際の

寂しそうな顔ばかりが浮かんできて笑顔はこれっぽっちも浮かびません。

「こんなにも、見たいのになあ——」

ちくちくと心残りは大きくなっていきます。意識と一緒にこの心も感情も無くなってしまうえば、もっと楽に終われるのでしょうか。それとも早く終わってしまうえば、この心も感情も消えて楽になれるのでしょうか。

舞い上がっていた煙がフツと途切れ、台風目のように、わずかに青空が覗きました。背中がじりじりと焼かれます。熱で頭がぼつつとしてきます。

物語の終わりは、刻一刻と近づいています。

「……」

恐る恐る、野花は斜面を見下ろしました。

先ほどまで立ちこめていた煙は、風に舞って薄くなっています。花時計のさらに下の方に、完全に地面に下ろされたおじさんの背中が覗きます。

「おじさん——」

上から見下ろして初めて知ったおじさんの全容から、野花は目を離せずにいました。

「……やめて、やめてよ」

野花の懸命な——けれども弱弱しい叫びは、おじさんにも、その周りで作業をしている人間たちにも届きません。

もちろん周りの植物たちにだって、どこか遠くに居るはずの彼女の仲間にだって届きません。

——私は一人ぼっちなんだ——

「うつ……」

感情を共感することのできない現実には、野花は初めて“孤独”を痛

感しました。

前までは、こんなのは当たり前だったはずでした。誰かと居るよりも一人でいる方が楽で、楽しくて、安定していました。それなのに今は一人でいることが不安で不安でたまりません。心もとなくてたまりません。

「いや、いやよ」

おじさんの体が一つ崩れていくごとにおじさんとの思い出までも崩されていくようで、野花は苦しさに身を振りました。

「お願い。助けて、助けて、誰か助けて！」

「何よ、ソレ」

泣き叫んでいる自分。そして、そんな自分を冷静に見ている自分。二つの自分が居ることに、野花は気が付きました。冷静な自分はゆらありゆらあり影を揺らして、

「あなたは、いったい何をしているの？」と聞きました。

「おじさんを勝手に突き放したのは貴方でしょう。あのまま素直におじさんとの別れを受け入れていたら、おじさんを許せていたらもっと違う別れもあったかもしれないのに」

冷静な自分の言うとおりでした。野花は言い返すことができません。

どうして自分は、こんなにもおじさんとの別れを怖れているのでしょうか。おじさんがなくなってしまうことを怖れているのでしょうか。

奇妙な自問自答は続きます。

「助けて欲しいと心から思うのはなぜ？ まさか、今更一人が辛いなんて言わないわよね。自分から逃げたくせに」

逃げた。

その言葉が野花の心を抉ります。

けれども野花は決して自分自身から目を背けようとはしませんでした。

「私は――」

野花は噛みしめるように、宣言します。

「一人は、もう嫌なの」

それは、野花の心の底からの本音。

「おじさんと一緒にいい。これからずっと一緒に居たい！ おじさんじゃなきゃ、嫌、嫌なの！」

おじさんを助けたい。おじさんとずっと一緒に居たい、二人で物語——思い出をずっとずっと作り続けたい。

堰を切ったように、素直な思いが次から次へとこみあげます。

野花は仲間と一緒にいることが怖くて仕方なかったのです。きつとみんなと比べられるだろうから。きつとみんなの方が自分よりも綺麗だろうから。

自分一本だけがさげすまれてしまう、残されてしまう——誰にも見てもらえないのが嫌で、野花はずっと逃げ続けてきたのです。周りのせいにして、意地を張って、現実からも寂しさからも目を背けてきたのです。

たった一輪だけにいる世界は、決して比較されない世界。相対評価のない世界。

それは、野花にとっての楽園でした。けれどもそれは偽物のオペラート。誰も自分を見てくれないからこそ安定を保てる停滞した楽園。非常にアンバランス。

矛盾。

足踏み。

その楽園の均衡を崩したのは、他ならぬおじさんでした。おじさんのおかげで野花は、自分が本当に望んでいた未来を思い出すことができましたのです。

「ようやくと、素直になれたのね」

冷静だった自分——おじさんに出会う前までの野花の幻影が、すうっと消えていきます。後には今の野花——孤独の辛さ、寂しさを知って、それでもなお、逃げ出さない強い野花が残ります。

「……………」

ゴクリ、と野花は息をのみました。

心臓がバクバクします。

顔から火が出るように熱いです。

喉もカラカラ。言いたい気持ちがいとも簡単にひつつきます。

それでも少女はいつもそうしていたように、ピンと茎を、葉を伸ばして。根っこという根っこを地面に深く、強くはって。

五つの花びらと、めしべおしべを震わせて、喉がはち切れんばかりに叫びました。

「お願いです、おじさんを――おじさんを助けて！」

野花の叫びが空気を木々を揺らして、辺り一面に響き渡りました。

「おや」

驚いた顔をして、一羽のカラスが応えます。

「ひねくれ者のお嬢さんが、自分から声をかけてくるなんて珍しい。初めての話だな」

カラスはひょいっとカーブをすると、野花のすぐ側に舞い降りました。

「その勇氣にこたえてやろう。おじさんというのは一体誰のことだ？」

野花はすぐに応えようとしたが、誰かと話すことに慣れていないせいなのか、思いつきり声を出しすぎたせいなのか、ゴホゴホと咳が先に喉を突きます。けれども、野花は必死で咳を、痛みをこらえて応えます。

「すぐ下に居る、あの電柱です」

「ああ、あのおじさんか」

カラスはバサリと羽をはためかせます。

「あのおじさんには随分と世話になったからな。何かしら恩返しをしたいと思っていたところだよ。いいだろう、その話に載った」

飛び立つカラスは、野花をちらと見めます。

「しかし見違えるように奇麗になったな。きっと、それもこれも――」

「な、何ですか？」

困惑する野花に、カラスはにやつと笑つて。

「いや、何でもないこれ以上詮索するのは野暮つてもんだ。ただ1つ言えるとしたら――」

くるりと、ウターンをして、カラスは野花の鼻先で言いました。

「おくびようもんだつたあんたが、勇気を出して他人に関わつた、その成果だろうよ」

そう言つと、カラスは再びおじさんめがけて飛んでいきました。

「何、それ」

野花は、鳥をただただ呆然と見送ります。

けれども、収まることのない動悸に、こつとも思つのです。これこそがその答えであるのだと。

体はどんどん碎かれて行きます。

意識も感情も、段々と細かくなつていきます。全ては粉になつて、風に乗つて、川へ流れて――消えていく。

「――」

後数分でおじさんは消えてなくなつてしまいます。けれどもどうしてでしょう。心残りはいつまでも碎けてくれないのです。

早く忘れてしまいたい思いばかりがガツンと硬い塊になつて、おじさんをいっぱいにするのです。

「忘れたくなんて、ないんだ」

辛くつて辛くつて、今にも心がはち切れてしまいそうなのに、それでもおじさんはあの子のことを忘れ去ることができなかったのです。他の誰かの物語はとつくの間にバラバラに壊れてしまいましたが、あの子と自分の物語だけは、掛け替えのない物語だけは、自分が無くなつてしまふその瞬間まで手放したくはなかったのです。

その時です。

「おじさん――」

自分と呼ぶ声に、おじさんは耳を疑いました。

「おじさん！」

再び、ハッキリとその声は聞こえました。幻聴なんかではありません。おじさんはハツとして意識を集中させました。すると、自分を目掛けて一目散に飛んでくる影が見えました。

「君は——」

それは、いつもおじさんの話を聞きにきてくれていたカラスでした。カラスは急降下しますと、粉々になったおじさんのまだ僅かに残る一かけらを啜えて飛び立ちました。

間一髪、おじさんは助かったのです。

「ぷはあっ」

おじさんは空いっぱいを吸い込んでから、安堵の息をはきました。

「いやはや、まさか君に加えられて空を飛ぶ日が来るなんて思わなかったよ」

「俺だってこんな未来、これっぽっちも考えたことはなかったさ。

ただ——」

「ただ？」

「あいつが、それを望んだんだ」

「あいつって……？」

おじさんは、ピクリと小さな体を震わせました。カラスは大きく旋回をして、目的地をあの高台に決めました。

「決まってるだろ、あんたの小さな小さなお姫さまさ」

「あの子が——」

あの子が自分を助けてくれたという事実、ちっばけなおじさんの心は満足でいっぱいになりました。

「今度会った時には聞かせてくれよな、あの子との慣れ染ってやつをさ」

背ばかりやたらと大きくて中身はすかすかであったあの頃よりも、今の方がよっぽど大きな存在であるかのようにおじさんは感じてい

ました。

やがて、あの高台がはつきりと見えてきました。バサリバサリと力
ラスとおじさんは花時計の上を渡っていきます。

「ただいま」を待っているあの子の元まで、もう少し。あと少し。

高台には、たくさんの野花が楽しげに揺れています。街外れではあ
りますが花畑の美しさは噂となり、今では隠れた名所になっていま
した。

今日も、街の住民たちがちらほらとこの高台を訪れています。

「やっぱり、君が一番綺麗だね」

「そう、かな」

照れる野花の隣には、石ころおじさんの姿がありました。

「ありがとね、おじさん」

あの時は勇気がなくて言えなかった言葉。

この言葉をどうしても伝えたくて、野花は勇気を出しておじさんを
救ったのです。

「私、おじさんのこと大好きよ」

少女が笑います。

「わたしもだよ」

石ころおじさんも笑います。

「相変わらずですね、二人とも」

「ねえねえおじさん、二人の馴れ初めを聞かせてよ」

周りの花々が野花とおじさんに詰め寄ります。

「ちょ、ちょっと何言ってるのよあんなたち!!」

そう言いながらも、野花もどこか嬉しそうです。

「いいともいいとも」

石ころおじさんは、小さな胸をムンと貼って応じます。

周りの草花はおじさんに耳を傾け、野花もチラチラとおじさんと草

花の様子を交互にうかがいます。いつの間にかカラスも降りてきています。

「そうだなあ 今から思えばあれは、一目ぼれみたいなもので――」

――一輪のおくびょうな花と、傾き電柱の、不器用だけど、純粹な

愛の物語――

（後書き）

共通テーマは「植物」「恋」

一、とある雑草の話

一言でいえばライ麦パンが美味しかったのです。

二、バラ姫

夢野久作オマージュ。書簡形式が書きたかっただけともいう。

三、傾き電柱と野花の話

ラノベ風を目指してみたはすが、気がつけば電柱おじさんがロリコンになっていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5762p/>

とある雑草の話

2010年12月19日01時59分発行